

「伝える」という活動をめぐって

—交通安全人形劇の活動から—

能瀬玲子

「太郎。何ですか、あのスピードは。おばあちゃん、いつも言ってるよね。自転車に乗ったら、スピード出し過ぎちゃいけないよって」

このような交通安全教育を目的とした人形劇を、私たち十二名のボランティアグループは、地域の保育所・幼稚園・小学校の交通安全教室や、高齢者の集まりなどで演じている。人形は手を入れて動かす三、四十センチのもので、台本、舞台、小道具など、ほとんど自分たちの手作り。お話は二十分くらい。そのような、単に標語を並べるのではない人形劇に、どのような意味があるのか。ここでは、「伝

える」ということに焦点を当てて、思いつくままに取り上げてみたい。

生きた言葉で伝えること

◇内からわき出てくる言葉

舞台で仕切ると、そこにもう一つの世界が生まれ、人形たちはそこに現れた瞬間から、おのおのその世界の人となって個性を持って生き始める。私たちは黒子の格好で人形を動かしながら自分で声を出しているのです。自然と、人形に演じ手その「人」がにじみ出てくる。

先の祖母のせりふに出てきた太郎が、自転車で大けがをした、車椅子の別のおばあさんからも話を聞く場面がある。そのおばあさん役の人は、台本にはないが、話の最後に必ず「太郎君。太郎君の命はたった一つしかないんだよ。だから大切にしないでちやいけないよ」と言葉を加える。淡々とした中にも説得力がある。標語的な言葉かけでなく、「これだけは伝えたい」という、その人の内からわき出てきた言葉だからであろう。



◇伝え合いながらつくる

私たちは台本を読み上げているわけではないので、せりふは毎回、正確には同じではない。演じ手側の考えでも変えるが、観客である子どもたちの笑い声や、「ダメダメ」といった登場人物へのかけ声、あるいは静かに伝わってくる真剣な様子など、相手側の反応によって、言葉を足したり、言い回しを変えたり、そのほか、声の張り、抑揚、テンポなども、微妙に変化させたりするように思う。すなわち、劇は一方的な投げかけではなく、演じ手と観客との間で、見えるもの、見えないもの、いろいろな形でやりとりをしながら進行していると言える。舞台の内と外とで、互いに伝え合いながらつくり上げていくように思える。

◇その「場」に心を据える

何年か前の『ヤン坊ニン坊トン坊の交通安全』と

いう白ザル三兄弟の劇の練習中のこと。私はヤン坊役で、別のメンバーが自身で女性警察官になって、舞台の外から人形たちに話しかけるといふ場面で、突然、「人形死んでるよ」と言われてしまったことがある。

私は別の役の人と、警察官が話している間に、次の場面に備えて、舞台裏のひもを左手でほどいているところだったので、ドキッとした。右手の人形は、話を聞いているように振舞っていたつもりだったが、心はそこになかった。なかなかほどけないひもの方に向いていたのだ。

「せりふがないからいいだろう」と思って気持ちが悪く、それが人形に出てしまう。言葉は発していなくても、その場に生かしていなければいけない。人形から自分の心が離れると、観ている子どもたちの心も離れてしまうだろう。すると、次に発する言葉も生き生きとは伝わらないに違いない。生き

た言葉は、その「場」に自分自身が、しっかりと心を据えることから生まれると感じている。

子どもたちに伝えたいこと

◇『表』のメッセージと自分の思い

言葉（せりふ）はもちろん重要だが、一方で私は極端に言えば、せりふが全く聞こえなくても観ているだけで内容が伝わり、おもしろいと思えるものを演じてみたいという気持ちがあった。三年前のある、頭の中に幾つかの映像（イメージ）が浮かんできた。舞台は森林公園で、幼稚園児の太郎と小学生のハナと両親、祖母の五人が、太郎の自転車練習のためにやってきたという設定。

イメージの一つは、公園の坂を、自転車に乗れない祖母が自転車にまたがったまま、悲鳴を上げながらジェットコースターのように下っていき、後から、お嫁さんと息子が大慌てで追いかけていく。

：それを孫の太郎とハナが、少し離れた広場からあきれて見ている場面。二つ目は、子どもたち二人だけで自転車で、こわこわ「つり橋」を渡って森の奥へと進んでしまう場面。三つ目は、森の中で、ハナが太郎に自転車の乗り方の注意をしていると、二匹の白ザルが木陰から出てきて、こっそり後ろで二人の動作をまねる場面である。

それらのイメージを中心に話を組み立てた。劇の『表』のメッセージは、「自転車の安全な乗り方」と「子どもだけで黙って遠くへ行ってはいけない」というものだったが、私はその話の中に別の思いも込めていた。視覚的なおもしろさと共に、自分自身もついている、森に対して抱いている種々の感覚——森を想像すると、すーっと引き込まれてしまいそうな感覚。それは自分の心の奥底に沈んでいくような感覚でもあるが、そんな漠然としたものも、表現してみたいという思いがあった。

◇現実の世界と心の冒険

話の中では、大人たちが坂で大騒ぎしている間に、広場ではハナに教わって太郎が自転車に乗れるようになり、どんだん一人で公園の奥の森へと行ってしまう。ハナは慌てて自分も自転車に乗って、太郎を追いかけ、引き止めようとするが、結局、二人は目の前にある「つり橋」に心引かれ渡ってしまふ。ここで、私は二人が日常とは隔たった別の次元へと、足を踏み入れてしまったことをイメージしている。

木々に囲まれた場所で、二人が「自転車教室」をしていると、二人の背後で白ザルが二匹、枝にまたがって動作をまねる。二人は気づかないが、森が闇に包まれ、帰れなくなって、太郎が「帰りたい」と泣きだすと、サルが、明かり（ライト）を差し出して慰めてくれる。そこへ大人たちがやっとたどり着いて、皆でほっとするが、そのときにはサルたちは

もう姿を消している。…というような話である。

それらの話を書いている時点では意識していたわけではないが、あえて今振り返って一つの意味づけを試みるならば、暗い森の奥で出会ったサルたちは、心の中の「未知」「未開」の部分、あるいは「可能性」を秘めた、隠れた部分と言えるかも知れない。そして、暗闇の中で歩むべき道を見失った時に差し出された「明かり」は、前進するため、すなわち、現実に向かって生きていくための「光」 Ⅱ 「希望」のようにも思える。あるいは、「知恵」といったものも連想される。子どもたちは、暗い闇の中で不安や恐怖にも襲われたが、思いがけない救いも体験できたのである。

一方、祖母のほうはというと、止めるのも聞かず「乗ってみよう」と貸し自転車にまたがったがために、坂を急降下する羽目になり、息子に散々叱られてしまうが、最後には祖母の気持ちを家族皆が受け

入れ、「ハナが、今度はおばあちゃんに教えてあげ」で終わる。

常識的な枠を少し超えてしまった祖母と、行ってはいけない所へ行ってしまった孫たち。彼らの日常から飛び出そうとする冒険心や好奇心は、新たな自分を開拓し、より豊かに生き始めようとする力でもある。結局、私はこの劇を観ている子どもたちに、太郎君やハナちゃんたちと一緒に、わくわくしながら森に入り、楽しさと共にたつぷり怖さも味わって、不思議な体験もし、そして、最後には家族の元に帰ってほっとするという「心の冒険」をしてほしかったということなのである。現実では、決して「子どもたちだけで遠くへは行ってはいけない」のだから。そういったさまざまな思いも含めて、「一人ひとりの命を大切に」交通安全を、人形力を借りながら、少しでも伝えることができたらと願っている。

(元幼稚園教諭)